

ブタ飼い

ハンス・クリスチャン・アンデルセン Hans Christian Andersen

矢崎源九郎訳

青空文庫

むかしむかし、ひとりの貧しい王子がいました。王子は一つの国をもっていました。それはとても小さな国でした。でも、いくら小さいとはいっても、お妃をきさきむかえるのに、ふそくなほどではありませんでした。さて、この王子はお妃をむかえたいと思いました。

それにしても、この王子が皇帝のお姫さまにむかつて、「わたくしと結婚してくださいませんか？」などと言うのは、あまりむてつぼうすぎるといふものでした。けれども、王子は、思いきつて、そうしてみました。なぜって、王子の名前は遠くまで知れわたっていましたし、それに、王子が結婚を申しこめば、よろこん

で、はい、と、言いそうなお姫さまは、何百人もいたからです。ところで皇帝のお姫さまは、はい、と、言つたでしようか？

では、わたしたちは、そのお話を聞くことにしましょう。

王子のおとうさまのお墓の上には、一本のバラの木が生えていました。それは、なんともいえないほど美しいバラの木でした。花は五年めごとにしか咲きませんが、そのときにも、ただ一りんしか咲かないのです。でも、そのにおいのよいことといたら、またとありません。一度そのにおいをかぐと、だれでも、どんないやなことも、心配ごとも、忘れてしまうほどでした。王子はまた、一羽のナイチンゲールを持っていました。このナイチンゲールは、たいへんじょうずに歌をうたうことができました。その小

さなのどの中には、美しい^{ふし}節が、いっぱい、つまっているのではないかと思われました。王子は、このバラの花と、ナイチンゲールを、お姫さまにさしあげようと思いました。そこで、さつそく、その二つを大きな銀の入れ物に入れて、お姫さまのところへ持つていかせました。

皇帝は、その贈り物を大きな広間に運びこませて、自分も、あとからついていきました。その広間では、お姫さまが侍女たちと、「お客さまごっこ」をして、あそんでいました。お姫さまたちに、ほかのことは、なんにもできなかつたのです。お姫さまは、贈り物のはいつている、大きな入れ物を見ると、大よろこびで手を打ちました。

「かわいらしい小ネコが、はいつていますように！」と、お姫さまは言いました。——ところが、出てきたのは、美しいバラの花でした。

「まあ、なんてきれいに造つてあるのでございましょう！」と、侍女たちが、口々に申しました。

「きれいどころではない！」と、皇帝は言いました。「なんと云つたらいいのか！　じつに美しい！」

ところが、お姫さまは、花にさわってみて、もうすこしで泣き出しそうになりました。

「まあ、いやですわ、おとうさま！」と、お姫さまは言いました。「これは造つたお花ではなくって、ほんとのお花ですわ！」

「あら、いやですこと！」と、侍女たちも、口をそろえて言いました。「ほんとのお花でございますわ！」

「さあ、さあ、おこっていないで、もう一つのほうに、何がはいっているか、見ようではないか」と、皇帝は言いました。すると、今度は、ナイチンゲールが出てきました。そして、ナイチンゲールはたいそう美しい声で歌をうたいましたので、だれもこの鳥には、すぐに文句もんくの言いようがありませんでした。

「シユペルブ！ シャルマン！（まあ、すてき！ うつとりするようですよ！）」侍女たちは、みんなフランス語がしゃべれましたので、フランス語でこう言いました。ひとりが、なにか言いだすと、そのたびに、だんだん大げさになっていきました。

「この鳥のうたうのを聞いておりますと、わたくしには、おかくれなさいました皇后さまの、音楽時計が思い出されます！」と、年とつた家来が申しました。「ああ、それ、それ、声も、歌も、まったく、あのとおりでございます！」

「そうじゃな」皇帝はこう言つて、まるで小さな子供のようになり泣きました。

「でも、ほんとの鳥とは思われませんわ」と、お姫さまが言いました。

「いいえ、ほんとの鳥でございます」と、贈り物を持ってきた、使いの者たちが、言いました。

「それじゃ、そんな鳥、とばせておしまいなさい！」と、お姫さ

まは言いました。そして、王子が来るのを、どうしても承知しようとはしませんでした。

しかし、こんなことがあつたつて、王子のほうは平気です。そのくらいのことでは、ひっこんでいません。すぐさま、顔に茶いろや黒のきたない色をぬりつけ、帽子を深くかぶつて、御殿の門の戸をたたきました。

「ごめんください、皇帝さま！」と、王子は言いました。「この御殿で、わたくしを使つてくださいますか？」

「さようか、働きたいと言つてくる者が、ずいぶんいるからかうと、皇帝は言いました。「だが、ちよつとお待ち。——そう、そう、ブタの番をする者が、だれかひとり入用じゃ。なにしろ、ブ

タがたくさんいるのでのう！」

そこで、王子は、御殿のブタ飼いにやとわれました。そして、下のブタ小屋のそばに、みすばらしい小さな部屋を一ついただいたて、そこに住むことになりました。

王子は、一日じゆう、そこにすわって、いっしょうけんめい、なにかを作っていました。そして夕方ごろには、もう、かわいらしい、小さなつぼを作りあげていました。つぼのまわりには、鈴がついていました。つぼの中のお湯がわくと、その鈴はたいへん美しい音色ねいろをたてて、リンリンと鳴るのです。そして、

ああ、いとしいアウグスチン、

もうおしまいよ、なにもかも！

という、むかしからの、なつかしい節をかなでました。

けれども、このつぼには、もっともつとじょうずなしかけがしてありました。そのつぼの中から立ちのぼる湯気に指をつけると、町じゅうの台所で、いまどんな料理が作られているかを、ここにいながら、たちまち、かぎわけることができるのでした。ね、これはまた、バラの花とは、まったくちがっているでしょう。

さて、お姫さまは侍女たちを連れて、散歩に出かけました。ふと、この節を耳にしますと、立ちどまって、たいそううれしそうな顔をしました。「ああ、いとしいアウグスチン！」というこの

節なら、お姫さまも、ピアノでひくことができただけです。もつとも、これだけが、お姫さまにできる、たった一つの節でしたが。それも、一本指でひくのでした。

「あれは、あたしにもひける節よ」と、お姫さまは言いました。

「あのブタ飼いは、きつと、学問のある人にちがいないわ。ねえ、あそこへ行って、あの楽器のおねだんをきいてきてちょうだい」

こういうわけで、侍女のひとり、その中へはいつていかなければならないことになりました。けれども、侍女は、まずその前に、木の上靴うわぐつにはきかえました。――

「そのつぼは、いくらでゆずっていただけなの？」と、侍女はたずねました。

「お姫さまのキスを十ください」と、ブタ飼いは答えました。

「まあ、とんでもない！」と、侍女は言いました。

「でも、それ以下では、お売りできません」と、ブタ飼いは言いました。

「ね、なんと言つて？」と、お姫さまはたずねました。

「とても、あたくしには申しあげられませんわ！」と、侍女は申しました。「だって、あんまりでございますもの！」

「じゃ、そつと言つてちようだい」そこで、侍女は、お姫さまにそつと申しあげました。

「まあ、なんて失礼なひとなんでしょう！」そう言うと、お姫さまはいそいで歩き出しました。——ところが、ほんのちよつと行

ったかと思うと、もうまた、あの鈴が、かわいらしい音をたてて、鳴り出しました。

ああ、いとしいアウグスチン、
もうおしまいよ、なにもかも！

「ねえ」と、お姫さまは言いました。「あたしの侍女たちのキスを十でもいいかって、きいてきてちょうだい」

「いいえ、ごめんこうむります」と、ブタ飼いは言いました。

「お姫さまからキスを十いただかなければ、つぼはおゆずりできません」

「なんて、いやなことを言うんでしょう！」と、お姫さまは言いました。「じゃ、だれにも見られないように、みんな、あたしの前に立っていておくれ」

そこで、侍女たちは、お姫さまの前に立ちならんで、スカートのはしをつまんで、ひろげました。そこで、ブタ飼いは、お姫さまからキスを十もらいました。そして、お姫さまは、ブタ飼いからつぼをもらったのです。

さあ、これはおもしろいことになったと、みんなは大よろこびです。夜も昼も、つぼの中のお湯を、チンチンわかせておきました。この町の中なら、ご家来のお屋敷でも、靴屋の家でも、いまその台所で、どんな料理が作られているか、わからないような家

は、一けんもありませんでした。侍女たちは、踊りながら、手をたたいてよろこびました。

「あたしたちには、だれが、おいしいスープとパンケーキを食べるのか、ちゃんとわかりますのよ。それから、オートミールとカツレツを食べるのは、だれだかも、みんな知ってますのよ。ほんとに、おもしろいつたらありませんわ！」

「ほんとにおもしろうございますわ！」と、侍女の頭かしらが言いました。

「そうね、でも、だまっていなくてはいけませんよ。あたしは、皇帝の娘なんですからね」

「はい、はい、そうでございますとも」と、みんなは、口をそろ

えて言いました。

あのブタ飼いは、ほんとうは王子なんです、だれも、そんなことは、夢にも知りません。ただ、ほんとうのブタ飼いとばかり、みんなは思いこんでいました。ところが、このブタ飼いは、一日もむだに日を送るようなことはしません。また、何かやっています。見ると、今度はガラガラを作りました。それを振りまわせば、世の中に知られている曲という曲、ワルツでも、ギャロツプでも、ポルカでも、どんな曲でも、鳴らすことができるのです。

「まあ、すてき！」と、お姫さまは、そこを通りかかって、言いました。「こんな美しい曲は、あたし、まだ聞いたことがないわ。

ねえ、あそこへ行つて、あの楽器のおねだんをきいてきてちょうだい。でも、もうあたし、キスはいやよ」

「お姫さまのキスを百、いただきたいと申しております」ききに行つた侍女が、もどつてきて、そう言いました。

「きつと、頭がへんなんだわ」お姫さまは、こう言いすてて、歩き出しました。けれども、ほんのちよつと行くか行かないうちに、また立ちどまりました。

「芸術というものは、すすめてやつたり、はげましてやらなければならぬわ」と、お姫さまは言いました。「それに、あたしは皇帝の娘ですもの。あの男に、こう言つてちょうだい。あたしは、きのうと同じように、キスを十してあげます。あとは、侍女たち

がしてあげますって」

「はい。ですけど、そんなこと、あたしたち、いやでございますわ」と、侍女たちは申しました。

「ばかなことを言うんじゃないよ」と、お姫さまは言いました。あたしだって、キスするのだもの、おまえたちだって、そのくらいのことできるでしょう。そのかわりね、おまえたちには、おいしいものや、お金をあげますよ」

こうして、あの侍女は、またもや、はいつていかなければなりませんでした。

「お姫さまのキスを百！」と、ブタ飼いは言いました。「でないと、わたしのものは、なにもあげません」

「おまえたち、あたしの前に立っておくれ」と、お姫さまは言いました。侍女たちは、みんな、お姫さまの前に立ちならびました。それから、お姫さまは、ブタ飼いにキスをしはじめました。

「あの、下のブタ小屋のところには、あんなに人が集まっているが、いったい、どうしたことじゃ？」そのとき、露台に出てきた皇帝が、言いました。そして、目をこすって、めがねをかけました。「あそこでさわいでいるのは、どうやら侍女たちじゃな。どれ、おりていって、見てやろう！」

こう言って、皇帝はスリツパのかかとを、ぐっと上げました。いつもはいている靴は、かかとをふみつぶしてしまつて、スリツパになつていたのです。

おや、おや、皇帝の早いこと、早いこと！　たいへんないそぎようでした。

庭におりると、皇帝は、そつと、しのび足で歩きはじめました。侍女たちは、ブタ飼いのもらうキスが、多すぎも少なすぎもしないで、きちんと数だけもらうように、むちゆうになつてキスの数をかぞえていましたので、皇帝のおいでになつたことには、すこしも気がつきませんでした。皇帝は、のび上がつて、ごらんになりました。

「いや、はや、なんたることじゃ！」と、皇帝は、ふたりがキスしているのを見て、言いました。そして、ブタ飼いが、ちようど八十六回めのキスをもらったときに、かたほうのスリツパで、ふ

たりの頭を打ちました。

「出ていけ！」と、皇帝は、かんかんにおこつて、言いました。こうして、お姫さまも、ブタ飼いも、とうとう、この国から追い出されてしまいました。

お姫さまは立ちどまつて、泣き出しました。ブタ飼いは、ぶつぶつ文句を言っていました。そのうちに、雨がざあざあ降ってきました。

「ああ、あたしは、なんてみじめな人間なんでしょう！」と、お姫さまは言いました。「あの美しい王子さまを、おむかえしておけばよかつたのに！ ああ、なんてあたしは、ふしあわせなんでしょう！」

そのとき、ブタ飼いは近くにある、木のかげにいつて、顔にぬつていた、茶色や黒のきたない色をふきとりました。それから、きたならしい着物をぬぎすてて、今度は、自分の王子の着物を着て、出てきました。さあ、こうなると、目もさめるほどりっぱなものですから、思わず、お姫さまも、王子の前におじぎをしないではいられませんでした。

「ぼくは、あなたをさげすまずにはいられません！」と、王子は言いました。「あなたは、りっぱな王子をむかえようとはなさらなかつた！ バラの花やナイチンゲールの、ほんとうのねうちも、あなたにはおわかりにならなかつた！ それなのに、おもちゃなんかのためには、ブタ飼いにまでもキスをなさる！ さあ、いま

こそ、あなたは、そのばつをお受けになったのです！——」

こう言うと、王子は、自分の国へ帰って、門をしめ、かんぬきをさしてしまいました。ですから、今度は、お姫さまが門の外に立って、うたいました。

ああ、いとしいアウグスチン、

もうおしまいよ、なにもかも！

青空文庫情報

底本：「マッチ売りの少女（アンデルセン童話集※）[#ローマ
数字3、1-13-23]」新潮文庫、新潮社

1967（昭和42）年12月10日発行

1981（昭和56）年5月30日21刷

入力：チエコ

校正：木下聡

2020年2月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://w>

ww.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ブタ飼い

ハンス・クリスチャン・アンデルセン Hans Christian Andersen

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 矢崎源九郎訳
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>